

# 作文指導についてのレポート Ⅱ

竹内頼夫

## 五 書く態度を指導すること

理想に向かって「書かせること」を実践しても、その後の指導が十分になされなければ効果はない。書かせっ放しでは、生徒たちにその場限りの押しつけだという印象を与え、ひいては「書く事の喜び」も、書き上げたという感動も味わせずになってしまうのである。では、具体的にどう指導するか、これが最も大切な問題である。で、事例を挙げてみよう。

(文例ハ) 忘れ得ぬ人

S・Y (一・女)

このせわしい現実の流れと共に、もう私達の能裏から消えかかった、あの戦争。

私は生まれつきの健忘症である。しかし、この時のことは、今だに思い出すことが出来る。

たしか、私が四才、戦争は真中途であった時、母に連れられて、人と荷物の大混乱した黒い箱、つまり汽車に乗った。はみ出そうな人又人で大の男の人でさえ乗れないのである。母も私まで連れて大

分困っただらう。うろろろしている内に、少し開かれた窓から私をひょっと車の中に入れた人がある。兵逐の人だ。同じ眼、ギスギスした体の人達が密着しているように、黒一色の車中。しかし姿に似わず皆非常に人達だ。私は無心にくれたコンベイ糖をポリポリ食べた。味と言っても、無いと言った方がよいくらいである。私の食べるのを見ていた人の黒いほおをつたって流れ落ちる涙を私は見た。でも私は小さかったので何故涙を出すかもわからなかった。人ごとに袋から出してくれたのを、スカートの前に一杯たままった。小さな服で母が一心に自分を見つけている。一人の人が入った時と同じように又窓から出してくれた。そして数多くの袋を各々とり出して私にくれた。母が頭を下している時にもう、発車だ。にぶい音をたてのそりのそり出て行く。そして大きい森の中にすいこまれていった。

ただこれだけだ。しかし今でさえ、あのコンベイ糖を食たい。又あの兵逐さん達にも会いたいと良く思う。

しかし、あの涙を流した兵逐の人々を又再び私達が見ることがあっているのだろうか。私は、あの人々の冥福を祈ると共に、誓って再びあの悲惨を自分達自身が犯さないと心がけようと思う。

私はこの文章に赤インクで添削した。結果としては次のようになつた。

このせわしい現実の流れとともに、もう私たちの脳裏から消え去ったあの戦争。——私は生まれつきの健忘症であるが、あの戦争中の一つの出来事は、今でも時々思い出す。

たしか私が四才、戦争は真最中であつただろう。母に連れられて、人と荷物でこの上もなく混雑した黒い箱、つまり汽車に乗った。はみ出そうな人また人で、大の男の人でさえ容易に乗れないほどである。母も私を連れて相当困つただろう。うろろろしているうちに少し開かれた窓から私をひょっと車の中に入れた人がある。海軍の兵隊だ。同じ服、同じようにギスギスした体つきの人たちが密着しているような黒一色の車中であつた。しかし姿に似合わず皆非常にいい人たちだ。その人たちは私にコンペイ糖をくれた。私はそれを無心に食べた。味といつても無いといつた方がよいくらいである。ところが、その時、私の食べるのを見ていた人の黒いほおをつたつて流れ落ちる涙を私は見た。でも私は小さかったので、その時は何故涙を流すのかもわからなかつた。人ごとに袋から出してくれたコンペイ糖が、スカートの前にいっぱいたまつていた。

小さな駅で母が一心に私を探している。一人の兵隊が、私を入れた時と同じようにまた窓から出してくれた。そして多くの袋から各々コンペイ糖をとり出して私にくれた。母が頭を下けている時に、もう発車だ。にぶい音をたてて汽車はそのりのそりと出て行く。そして大きい森の中にすいこまれていった。

ただこれだけだ。しかし、今でもあのコンペイ糖を食べたい。またあの兵隊さんたちにも会いたいとよく思う。しかし、あの、涙を流した兵隊さんたちを、再び私たちが見ることがあつていいのだろうか。私はあの人々の冥福を祈るとともに、誓つて再びあの悲惨を自分たち自身が犯さないように、心がけようと思う。

わずか四才の頃の記憶を「ありのままに書く」のがよいとしても、あまりに鮮明に書けばうそだということにならう。もつとも、私は、極度に強烈な印象であつたなら、長く強く残っていることはあり得るし、それに高校生にもなればある程度過去の印象を現在の位置で整理して受けとめることはあつてよいと認めて読んでいた。

私は手を加え過ぎないようにと用心しながら、どうしてもここまです添削せずにはいられなかつた。主観的に陥らぬようにと気を使いながら、「主観的になつても仕方がない」という気持も動いていた。誤字も多く、送り仮名の誤りもある。句読点の有無から来る曖昧な部分もある。そして、兵隊が死んだかどうかはつきりしないのに「冥福「祈る」のは変である。しかし何よりも心配なのは、朱を加え過ぎて次回から書く意欲を減退させはしないかということである。そこで私は朱を加えた後、原稿用紙の末尾に次のように短評を記した。

「よろしい。幼なかつたとはいへ、あの時代の兵隊さんの涙は忘れられないものでしょう。」

私ほもつと書きたかつた。何を書くか(素材・主題)については焦点がしばられていてよいが、その素材の受けとめ方がやゝ観念的と

言える。殊に結論との結びつきにおいてそれが言える。それはまた、結論の出し方が早過ぎるとも言えるのである。平和を願う気持が強いからといって、簡単に喜ばないものである。それが直感あるいは「ひらめき」によつたものである時には、その後の動機づけが

強ければどちらにでも向き、どちらの方向へでも簡単に理論化してしまうのが青年にありがちな傾向であるからだ。(青年だけでなく、日本人全般に見られることかもしれない。)私はそのようなことについて、励ましながら注意を促したかった。しかし、一度に何もかも問題として与えることは、先述の「意気喪失」を恐れて控えた。そして全体への講評にゆだねることにした。それに何よりも百五十余人の作文(原稿用紙五百枚余り)が机上にあつて、先が急がれた。

次の文例は、添削した後、本人の納得を得た上で文集に入れたものである。添削のまゝ示す。

(文例ニ) ルンペン

Y・F(一・男)

ある日の学校帰りであった。ぼろぼろの着物を着て、髪はぼうぼうと顔面までたれ、女か男かわからないみなりをした乞食らしいものを見た。ぼくはそれをゆっくりとあるきながら見た。よく見ると目は見えないうらしく、天をじっと、見えるかのようににらみ、なにかもとめているようだった。そしてついで一歩一歩とあるきながらなにかさげんでいた。親兄弟などいないのだろうか。ぼくは友人に言った。「明日今日かは死ぬかもしれない」と。

家に帰って勉強しようとした。しかしあの乞食のことが思いだされて、なんだか落ち着かなかつた。あの乞食を思えば思うほど、乞

食がにくくなり、また社会がにくくなった。なぜあんな身なりをして、人をみょうな気持に落ちいらすのだ。あまりにも今の社会は生存競争がはげしいのではなからうか。

わずか原稿用紙一枚の短い文章であるが、純なヒューマニティが嬉しかった。私はこうしたヒューマニズムこそ伸ばしてゆかねばならないと思う。ただ、この文章でも結論が観念的であり、早過ぎる姿勢もある。殊に、自分たちの責務を怠つて社会の罪をなじる傾向は十分警戒しなければならぬ。そこで私は最後の一文を次のように改めた。

「はげしい生存競争の落伍者と言えはそれまでかもしれないが、今の自分にはどうしても割り切れないものが残る。」

この一文は、F君自身も苦心したらしく、何回も書き直していた。それが私に勇気を出させたのもある。そして最後に次のような評語を誓いた。

「君のヒューマニティが溢れていて好ましい。これからも考え続けよう。結論は急がなくてもよいから。」

後に、このF君は緻密な論理を組み立てるようになった。今一つの例を挙げよう。これも添削の形のまま示す。

(文例ホ) 私の不安

T・K(一・男)

高校に入学して、半年も過ぎたのに僕の実力は低下する一方である。何故実力がつかないか、大分考えて、勉強の仕方も考えてみたがやっぱり止まらず下がるばかりである。これも自分の努力が足りないかと思うけれど僕にはそういう機会が少ない。このまゝにこの

「思うとどうなのか、これも書け。」

学校を卒業してしまふのかと思うと……  
また母も僕に大きな期待をかけて無理して学校に出してくれてい  
る。それなのに僕がこの様なざまでは、母もがっかりして学校に出  
す気にはなれないだろう。生活が苦しいという条件の中で勉強する  
僕には、どうも学校の生徒と共に生きていくということは自身も  
てない。僕をよくリードしてくれる。また信用のおける友達があ  
しい。

高校生になると、女子は別として、家庭の内暮はあまり話したか  
らないものである。この文章にも、すべての生徒に共通に見られる  
「飾る」という姿勢が見られる。「……………」でぼかしたりするこ  
ろに端的に表われていると言える。しかし、ここでは「生活が苦し  
い」という家庭の条件をもっとくわしく書くことが要請されねばな  
らないのである。人前ではあまり話したがらないことを書きなが  
ら、飾ろうとする姿勢は、隠せずに書くように勇気づけてやること  
によって改まり、率直に自己表現出来るようになると思つた。だか  
ら、添削した後には、

「負けるな、押しで行け。これでもかこれでもかと押しで行け。  
家庭の条件、母の期待、そういうものは私にも身にしてみた記憶と  
なっている。それらを乗り越えて強くなるのは、強い意志と根気  
だけだ。」

と記した。

その後、自分の書いたこの評語を読んでみる時、「何と主観的な言  
い方か、あまりにも感傷的な身上相談型・同情型になっているでは  
ないか」とじれったくてたまらない。こうした評語を読みかえす度

に、批評とか添削とか軽々しくしてはならない、少くとも一度批評  
または勇気づけのことは考えた後に、再びそれでいいかどうか考  
えてみなければならぬと思う。つまり評語そのものを推敲しなけ  
ればならないと思う。それというのも、教師と生徒とは情的にも密  
に結びつかなければならぬが、情だけに頼っているや甘えさせる  
ことになりがちだし、それでなければ逆に反発を感じさせることに  
なるのである。情も知的に整理されたものでなければならぬと思  
う。

蛇足になるが、このK君はその後の私の「勇気づけ」から次第に  
反発して行つた。それはちょうど磁石の同極が反発し合ひよりな  
ものだらうと思われた。ただ、卒業後就職先から次のような手紙をも  
らい、せめても教員となつてゐる。長くなるが全文を掲げさせて  
いただく。

拝啓

先生お元氣ですか。私も増々元氣に勤めています。他事ながら御  
休心下さい。

郷里を離れて煙の都へ来てはや三ヶ月。思い出します、先生。先  
生に教えていただいた二ヶ年間、今思えば、随分先生には御迷惑を  
かけたことでしよう。先生には一つ一つ反抗して、またいやな事も  
大分言つたことでしようが、先生はじつと我慢していらつしやつた  
ようです。あの時はちょうど反抗期でもあったのでしようが、し  
かし今思うと、先生の苦勞話が私をどんなに勇気づけたことではし  
ょう。私も先生にはまさるとも劣らぬ苦勞をして来たつもりです。授  
業中よく眠つていたのでしよう。あれもアルバイトの爲でした。その

頃私は学校に行くということで一生懸命でした。父亡き我が家の家計は苦しいものでした。自分の学資は全部自分でかせがねばならず、また家にも多少の手伝いをしなければならなかったのです。学校に何の為に行くか、それさえわかりませんでした。眠ってもよいからただ行きさえすれば、という気持ちでした。一晩中寝ないでそのまま学校に行ったことも再々ありました。最もひどい時は、三晩も眠ることが出来ず、学校に行つて授業中か、アルバイトの舟の中でちよつとしか眠りませんでした。そんな時、自分は何の為にこんな苦勞までして学校へ行くのか、他の奴らは遊んでいて学校に行つてゐるのにと、妬けて、ぐれそうになりました。しかし先生の話を聞いて自分というものを取り戻したようでした。こうした生活の中で、学校だけが自分のいやな気持のはけ口となりました。その為運動も続けました。そして、言いたいこともかつてに言つて他人の感情を考えたこともない、愚かな私でした。けれど、先生の話を聞いて二年の終り頃から自分の立場というか、将来について考えるようになりました。おかげで今こうして立派に就職出来ました。これも先生のおかげだと、有難さが身にしみてわかつて来ました。

職場では学校時代のように言いたいことも言えないようです。しかし皆がよくかわいがつてくれますので、私も楽しく毎日が送れます。

先生にお詫び万々筆をとりましたが、このへんで筆を置かせていただきます。先生も御健康に注意されてお暮し下さるよう。 敬具

以上は僅かな例を挙げたに過ぎないのだが、要するにこうした作文指導は、表現技術の指導と同時に、書かれている内容についての

指導助言を根氣強く綿密に続けねばならないのだと思う。しかもその場合、生徒各自の個性を尊重し、個性に即して助言指導しなければならぬと思う。更にそれは生い立ちや環境などから広く総合的に観察しての指導でなければならぬ。むずかしい問題であつて、しばしば溜息をつかせるのであるが、根氣強く指導しなければならぬまい。T・K君のような生活はかかなり多いのである。

さて、「文の書き方をお教へ願います」について、具体的にどう方法を示すか、であるが、私は絶えず具体的な作品に即して行なうべきだと思ふ。そして、この「どう書いたらよいか」は全体に対して一括して指導することが出来るし、むしろその方が効果も上がると思ふ。具体的な文例を示して全体で討議し修正するという方法によつて、「ことば」への愛情を強め、認識を深めさせる方法こそ、最も妥当なものとして私たちが採るべきものであらう。そして、この指導は出来るだけ初期において力を入れるべきであらう。

私は、一年生の一学期の間に作品を添削する度に痛感して来ながら、やつと二学期になつて「記録と発表」という単元でその機会を捉えた。その時私は次のように例を挙げながら解説した。今、その時の原稿のまゝ記す。(註5)

(一)文章を書くにあつてまず考えねばならないことは「何を書くか」であり、次に「それをどう書くか」である。上達すれば、その「表現の効果」を考えねばならない。すなわち推敲がなされねばならないのである。ただし、今は主として「どう書いたらよいか」を問題としてゆくことにする。

(二)文章の類型として次のように言われている。

A 内容もよい、書き方もよい文章

B 内容はそれほどでもないが、書き方としてはよい文章。

C 内容はよいが、書き方の悪い文章

D 内容も書き方も悪い文章

むろん、A がよくてD が悪いことははっきりしている。が、B とC を比べてみると、C のように書き方が悪ければ、せっかく表現しようとしたことが誰にも伝わらないことになるから、「内容はよいが」という言い方も「内容はよいらしいが」としなければならぬ。つまり、私はC よりもB の方をまずよしとしたい。今はそういう立場(観点)から話を進めることにする。

(三)作文に書くことは、知識であることもあるが、むしろ具体的な体験と思索に基づいた実感や確信であることが望ましい。だから、文題が与えられた場合はその文題にふさわしい自己の生活体験をすばやく思いつくることが必要である。もちろん、課題が与えられなくても、文章に表現することは自己の生長を大いに助長するものであるから、どしどし書くべきである。むしろ強請されずに書いたものの方がどれほどかすばらしいものになる。

例では、それをどう書いたらよいか。以下に実例を示しながら「こういうふうには書くな」という点を述べる。

I 前後に矛盾のある文章を書くな

文章構成には論理的思考力が必要であることは言うまでもない。

次の例は、その論理的思考力の不足から来た欠陥を示したものである。

(文例A) 将来の事については考えてみたことはない。考えてみてもそこには何の希望もわかなかった。(一・男)

(文例B) 僕の持っている不安といっても、どれといつてあるようではなく、ないようであるのだから、そう思い出せないが、一つだけ書いてみよう。それは、(下略)(一・男)

(文例A)では「考えてみたことはない」と言いながら、「考えても希望はわかかなかった」と、考えてはいるのだから明らかに矛盾している。(文例B)では「はっきりしない」と言いながら、「それは……」以下に具体的に書いているのだから矛盾している。それに、「持っている不安」を、思い出すとか思い出さないなどと言うのも変だ。

ところで、『徒然草』の冒頭の一節を読んでみると、そこには、書き綴っているうちには前後に矛盾が生じることもあってか、「あやしくこそものぐるほしけれ」と書かれている。しかし、これは、あくまでも長い期間にわたって、その時その時で「うつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書き」つけてゆくうちに生じてくることであって、『徒然草』の一章一章について見れば決して矛盾したこととは書いてない。私たちが文章を書く場合にも、例えば高校一年の時に書いたことと三年になって書いたことは矛盾していることがあり得るし、あっても差し支えはないのであるが、長くても僅か一日か二日のうちに書く、しかも一編の文章の中に矛盾があつてはなるまい。文例には短い部分しか挙げなかったが、長い文章になると、書き出しと結びが矛盾しているような例はかなりある。要するに前

もって「構想を練る」ことが必要だし、そこには論理的な思考も必要なのである。

Ⅰ ひとくぎりの文の中に何もかもゴタゴタつめ込んだような文を書くな

このこともⅠと同様、論理的思考力の欠如から生ずるものである。ひとまともに書こうとあせらずに、ひとつずつ順次に書かねば意味の通じないものになってしまう。

(文例C) 記事の中には八代の子供達が七十五才以上の孤独なお年寄に色々の贈り物を贈り、歌、踊りと、人生も後少ない人達の慰めはその人達にとって何とも言えない気持だったろう。(一・男)

(文例D) 一週間前から新聞の予想はやっぱり先場所優勝した若の花が僕は優勝するような気がする。(一・男)

(文例E) 小雨が瓦の上を薄く半透明な薄が走っている。(一・男)

(文例F) 私達が芽生えようとする時期に、このような女先生を迎えたことは、相談相手があったにしても、たよりになる人はまずこの先生だったろう。(一・女)

このような文例は枚挙すれば限りがない。(私は時間の許す限り

で、こうした実例を修正させてみた。生徒たちは話し合った上で立派に改め得るのである。)

Ⅱ 印鑑を押したような文章を書くな

文章はハンコで押して書くのではない。鉛筆やペンの先で、自分の生活の中から、頭の中から流れ出てくるものを自分のことばで書きとめねばならない。だから、古くからどこにでもあることばを、ハンコで押したように書くな、自分の脳みそをくぐりぬけて来たことばで書けと言うのである。

Ⅲ わざわざむずかしい言い方をするな

これも右のⅡと関連したことであるが、むずかしい言い方をするとかえって意味の通じないことになりがちである。

(文例G) 過去の思い出を今一度思い起す時、あらゆる人物と出来事が走馬燈の如く薄れ消えゆきわずかに残った記憶をたどって綴ってみよう。というのはそう古い話ではありません。(一・男)

古くないのに「わずかに残った」というのも変だが、「走馬燈の如く」をはじめ、全体にむずかしい言い方をして、しかもそれは使い古されたことばで、かえって変な感じを与えている。「綴ってみよう」と「ありません」も統一したものだ。

(文例H) 人は特に花のように贅飾り美しい。まるでファッショ

ンモデルスターのようだ。若き乙女は何をか求めん。そして何をか得ん。僕は騒々しい所は大嫌いだ。それよりか僕は最大の孤独という代物を求めるだろう。そして何をか為さん。(一・男)

「何をか求めん」とか「最大の孤独という代物」などという書き方より、「まるで……」とか「大嫌いだ」といった調子で書いた方が誤りもなく、書き易くもあつただろう。

(文例I) つくづく日本の外交方針に疑念の観がうかがわれてくるのだ。(一・男)

「日本の外交方針が疑がわしくなつた。」では何故いけないのだろうか。

(文例J) 私は、あの広い水辺にただ一人、深考第一の少女として案内された。そして波と共に語らい、また笑つて、欲求全満の幸を味うと共に、……(下略)……(一・男)

「いつもふさぎ込みがちだつた私は、ただ一人で、いつの間にかあの広い水辺にたどりついていた。そしてそこで、波を相手に話したり笑つたりしていると、何だか自分の欲求がすべて満ち足りたような快さをおぼえた。」としたらどうだろう。

V 「書き出し」や「結び」でうまい文章にしてやろうと思ふな文章は全体のなかみとその書き方が大切なのだ。「文例G」に

しても「書き出し」をうまい文章にしようと思ひ過ぎた結果、かえつてわかりにくいものとなり、また以下の文体とも不釣り合いなことになる。

(文例K) もう今から何年たつたでしょうか。私が小学生六年生でしので四年前です。とも子ちゃんは……(一・女)

はつきり「四年前」と言えるのに、「もう何年たつたでしょうか」とは大げさではないか。

VI 句読点もことばとして扱え

句読点を打ち過ぎると読む者にじれつたさを感じさせるが、必要な所に省略するととんでもない誤解を招くことになる。

(文例L) 私は無心にくれたコンベイ槽をポリポリたべた。(前出)

「無心にく」という部分は「たべた」を修飾することばなのだが、読点がないので「無心にくれた」と続いてしまふのである。

VII 表記法について

段落のこと・対話符号のこと・かなづかいのこと・当用漢字のこと・略字のこと・送りがなのこと……など、それぞれの作品に赤インクで訂正しておいたからよく見ておくこと。



## Ⅷ 書く態度として次の四点を銘記せよ

1 あらかじめ構想を練れ。何を書くか(主題・素材)、いかに書くか(構想)を一応頭の中で秩序づけよ。そしてその中心点を明確にしていけ。前以つて要点を個条書きにメモしておくぐらしいの周到さがあつてよい。もちろん文章の種類によつては必ずしも結論を必要としない。

2 氣どつたり、ふざけたり、ほらを吹いたりしないで、素直に書け。

3 文字は一字も消してはならないと思つて書け。

4 書き終つたら読み直せ。句読点をつけてあるか、誤字はないか、段落はつけてあるか、そしてよくまとまっているか、などをよく読み直してみる必要がある。

以上の解説の後で、私は優秀作を読んで聞かせた。生徒たちは、私のこのような、教科書から離れての授業を(「作文の書き方」の他に「演劇とは何か」「万葉人の生活」など)特別講義と呼んでいたが、この講義も熱心に聴講してくれた。うぬぼれのようにも聞えるだろうが、その後の作文からみて、少しずつでも前進させることが出来たとみている。講義の時も、受験勉強に熱中している若干名を除いては、皆熱心にノートにメモしていた。

こうした指導の際、留意しなければならない点は、本人の前で本人の作品はたとえ一部分でも読まないことである。それは、賞めたりうぬぼれさせてもならないし、悪例として示して自尊心を傷つけたり、劣等感を持たせたりしてもならないからである。三学級の授業

を担当しているなら、それぞれ他の学級の文例を用意するぐらしいの配慮は当然なされねばならない。もちろんその場合も匿名でする方がよい。

とにかく、こうして「表現」を客観的なものとして考察させるのである。そうした後に、添削された各自の文章を読み直させて「推敲」の姿勢を作るのである。

## 六 語法の指導を採り入れる

「真実を自由に語れ」と言い、それを「こういふふうには書くな」と言つて来た。要するに作文を書く態度に主眼点を置いて指導して来たのであるが、これらは導入期において力を注ぐべきものだと思う。私たちは、更にどう表現したらより一層正確に、また鮮明に自分の考えや感情を伝え得るかという、「効果的な表現」へと導かねばならない。私は、この「効果的な表現」への志向を推敲と呼びたい。そこには語彙的な語彙選択のこともある。しかもそれはどこまでも主題の強調ということと結びついた推敲でなければならぬ。その点ではむしろ思考の指導と言つた方が当っているかもしれない。

ともあれ、真実を自由に語れと言つても、作文となるとどうしても文字の抵抗があつて、話すことに比べれば不自由なものである。話す場合には相手との共通な場・共通の話題などという補助手段があつて、不備な語法を側面から補足してくれるのであるが、書く場合にはそれはないのである。だからこそ、私たちは明確な伝達を期

して、ここでどうしても「語法」の指導を作文指導に採り入れねばならないのである。

「語法」の学習を作文に採り入れる時、それは孤立した「文法」という授業には見られない活気を提供する。そして、それがそのまま「ことばによる思考」の鍛練に役立つ。「ことばによる思考」の鍛練は、作文指導には欠かせられないものである。

ただし、推敲（ないしは語法）の指導は、前記の導入期の指導とあまり接近して行なうことは好ましくない。何事によらず、こまごました注意・忠告は煩雑な感じを与え、意気喪失への近道となりがちであるから。要するに自己のペースで書きたいことが書ききれるように、何度かの機会を経た後に、推敲の作業は来るべきものである。早ければ一年の末頃、遅くとも二年の始めが好ましいと思う。また推敲の機会は、書いた後何ヶ月かの冷却期間を置いて再び読むという手数をかける方が、いわゆる「他人の眼」になり易くて効果的である。

― 実例を示しながら話を具体的に進めよう。

(文例 a) 僕が新聞を見ていたら、重光全権等の訪ソのことがほとんど新聞の一面全部である。(中略) 次に三面に非常に感ずることは殺人事件とか自殺とかグリーン隊などのことが、このうちの一つか二つは必ず三面に出てくるが、こういう生くるしいことを平気でやる人達は気が狂ってやるとしか思えない。

(一男)

一読しただけでもぎこちなさの目立つ文章である。こんなのは推敲以前だという人もあるだろう。しかし、こういう文章があるからこ

そ、語法の指導——しかも基礎からの——が必要なのである。とにかく、こういう文章に接する時、文表現の技術などはいつの間にか自然に伸びるものだという考えは実に安易なものだと、打ち捨てざるを得ないであろう。

さて、この文章を板書して生徒たちにいろいろ改めさせたところ、生徒たちはいつもの授業には見られぬ張り切り方を見せた。以下にその時出た意見を列挙してみよう。まず最初の一文について、

○「訪ソのことが全部である」という述語が主語に対して不自然だ。

○それは「新聞を見ていたら」という修飾語があるから不自然になっっているのだ。

○やはり述語を改めるべきだ。

○「ほとんど新聞の一面全部に書いてあった」と直したらよい。

○いや「ほとんど新聞の一面全部を費して書いた」の方がいい。

○それに「新聞を見ていたら」「新聞の」と重ねて書く必要はないから一方を消してもよい。

○それにしても「見ていたら」というのはうそだ。一面全部に書いてあるのだったら、一目見ただけでわかるはずだ。それから、一面には広告やコラム欄もあり、新聞によっては社説もあるのだから、「一面全部」と言うのは大げさ過ぎる。

こうして結局、第一文は次のように改められた。

「新聞には重光全権らの訪ソのことがほとんど一面全部を費して書いてあった。」

次いで第二文では、

○「三面に」は「三面で」と直さねばならない。

○「三面に：出てくる」だからそれでよい。そんな速くへ係って行く前に、「三面に：感ずる」とあるから変だ。やはり直した方がよい。

○ここでも「三面に感ずることは」「三面に出てくる」とダラダラしているから一方の「三面に」は削った方がよい。

○「感ずることは：出てくる」という主語述語も変だ。

○その前に「が」を消した方がよい。「感ずることは：出てくるが：思えない」となって変だし、わかりにくい。

○「が」をとっても主語と述語は何とかしなければならぬ。

ここまで来ると、性急なハイティーン気質からか、「いっそのこと初めから書き直しましょう」と言い出す者が現われた。私はそこで「出来るだけ書いた本人の意志は尊重しなければならぬ。だから特に主語（言いたいこと）だけは変えないようにして訂正してみよう」と促した。暫く考え込んでいたが、

○「感ずることは：必ず出て来るということだ」とすればよい。

○「：と感ずる」というふうに述語にまわしたらどうだろう。

○「三面に非常に感ずることは」はなくても本人の言いたいことは変らずに伝わってくるから、全部削ってしまおう。

ということになり、結局、第二文は、

「次に、殺人事件とか自殺とかグレん隊などのことが必ずのように三面に出てくるが、こういう生ぐるしいことを平気でやる人たちは気がくるってるとしか思えない。」

と落ち着いた。

ところで、最後まで指摘がなかったので私の方から問いを出した。

「<sup>なま</sup>生ぐるしい」ということばはこのまゝでいいか」と。すると、

○それはイキグルシイと読むのだろう。

○それなら「生ぐるしい」と送り仮名がいるはずだ。

○どう読んでも意味がしっくりしない。ふさわしいことではない。

ということになった。そこで、「殺人とかグレん隊のケンカなどの記事を読んで、みんなだったらどう感ずるか。どう形容するか。」と尋ねた。考え出した生徒たちから、「生ぐさい・醜い・見苦しい・惨酷な・非人道的な」などが挙げられた。私はそれらの中から一つを選ばせることはしなかった。それぞれ自分のことばで形容すればよいのであるから。すると今度は、「非常に感ずる」も不自然だ、と、これは生徒の方から言い出した。ここは当然、「非常に醜く思うのは」または「非常に腹立たしく感ずるのは」としなければならぬと言っているのである。

以上のように、多数の力で相互に添削し合うと問題のありかもあるし、妥当な表現も出来るのであるが、書く時は一人であるのでウカツに過ごしてしまうのである。

語法の指導が必要であることは言うまでもないのだが、それを意識させ過ぎて、あまりにも煩雑な感じを与えることは避けねばならない。「書き方はよいけれども内容の乏しい文章」が出来てしまうから。対外コンクールに入選するような文章をいきなり望むのではないけれど、不安定な青春期を、書くことによって豊かで確かなものにして行くためにも、いわゆる「内容のある文章」に重きを置かねばならないのである。「語法」の問題はあくまでも基礎的手段であることを念頭に置いて指導しなければならぬ。

以下に、さらに実例を挙げながら、問題のありかを探ってみよう。

I 主語・述語・修飾語など、文構成の重要成分の省略——読み直せばすぐに気づくはずの誤りである。

(文例 b) 世界の動力の一つである石油、この石油について一番大切な港、そして例の短距離コース航路である所のスエズ運河です。中近東における第二次大戦以後の民族主義が活発となり、イランの石油紛争、そして今度世界の一大問題となったスエズ運河のエジプト国有化でした。

(一・男)

「スエズ運河です」の主語もない。「スエズ運河は：大切な港であり：航路である。」という気持であらう。いやに翻訳調の文である。また「イランの石油紛争、エジプト国有化でした」の主語は何なのか、書き出しのこの文では決して省略できるものではない。また「世界の動力の一つ」は「動力資源の一つ」とあるべきところだ。ただ、文脈の力などを借りて、主語や述語や修飾語を省略し得る場合もあるし、また指示語で代えることが出来る場合もあることは認めさせてよい。例えば、

私は財布を盗まれた。が、間もなく出て来た。

という文例では、「出て来た」の主語はなくても、前の文から「盗まれた財布が」という主語は明瞭である。しかし、文例 b は文章の冒頭であり、そこでは許されないことだ。次の例も文章の冒頭である。

(文例 c) スエズ運河の問題について、いよいよ重大な段階に入り、エジプト拒否がやまとなっている。

(一・男)

何が何を拒否するのか、書いている本人にしかわからない。また、このような政治・経済問題を扱った文章にはほとんど全生徒に見られるのだが、あまりにも新聞の文体の模倣が強すぎるようだ。この例はその極端な一例とも言えるのだが、まるで

スエズ問題 重大段階へ

エジプト拒否がやま

という見出しをわざわざ繕ったような文になっている。こうした文体はそのまま思考法まで新聞記事的であって、片寄らないが深さが無い。この傾向は、どうしても文体と思考法の両者から改めて行かねばならない。

II 主語と述語の不照応——これは、書き始めた時の主語と、書いている途中での主語とが錯綜したものと言うことが出来る。

(文例 d) 大抵の現代人の考え方は、人によって非常に違っているとあります。

(一・女)

「考え方は」までと「人によって」からと主題の錯綜が見られる。また「大抵の」と「人によって」という修飾語の使い方がますますとも言える。こういう例は多い。

(文例 e) この映画は昨年五月、京都大学の木原教授を隊長とす

る学術探険隊がパキスタン・イラン・アフガニスタンに向つた。

(一・男)

おそらく、「この映画は」と、映画の成立について解説しようと思ひ始めたものだろうが、書いているうちに「探険隊」のことに主題が移り、「向つた」という述語でまとめるといふ結果になったものであろう。私は「向つた際に撮映されたものである」と補なわせた。

(文例 f) 私はこの映画を近年見た色々の記録映画の中で見たえのある作品だ。

(一・男)

(文例 g) 私が一日の中で一番好きな時間は市場へ連れていってもらう事である。

(一・女)

(文例 h) 次ににくりらしいと思ふことで、彼の悪いくせの一つで、だまって僕の物を拝借する。

(一・男)

(文例 i) 「勉強」とか「運動」とか「入試」とか「就職」とかいったものがそれではなからうか。きっとそうだ。私は先ず彼らに打ちかつという事である。

(一・男)

(文例 j) その恩師のために今でも大へん僕の利となつて毎日を過ごすことが出来る。

(一・男)

以上はいずれもそっかしい文章と言うことが出来る。主題・構想を練るといふ修練ができていないとも言えよう。ここでも、「あわわてずに書け。一文の中に何もかも書きこもうとするな。短文で、ちよろど蜘蛛が糸をたぐり出すように、順次に書け。」という指導が必要となつてくる。最後の例 j でも、「その恩師のために」は

「毎日を過ごすことが出来る」に続いて行き、その間に「今でも……利となつて」がはさま込まれているといふふうに一応の説明はつくとしても、「毎日をどのように過ごすのか」また「先生の何によつてなのか」を説明する文節がなければ意味は不鮮明である。

■ 助詞の使い方——これも全く文法の問題である。ただけは言い切れないものがある。つまり書いて行くうちに主題が他の方に移行したとも言えるのである。

(文例 k) この人こそ私は今までのうちで忘れられぬ人はいないだろう。

(一・女)

簡単に改めるなら、「この人ほど私には忘れられぬ人はいないだろう。」または「この人こそ私にとっての忘れ得ぬ人である。」としてよからう。けれども、「この人こそ」と言えは「忘れられぬ人だ。」という述語を予想して書いたであらうし、「私は」と言つたからには、「忘れられない」といふ述語を予想して書いたであらう。そこに問題がある。

(文例 l) 「しろ」はその産まれたての子猫にも父親のようにかわいがつた。

(一・男)

これも初めは「子猫にも父親のような愛情を注いだ」と書くつもりだったろうか。それが途中で「父親のようにかわいがつた」と變つて来た。初めから後者のつもりなら「子猫をも」としなければな

らない。ただし、前者か後者かは筆者自身に推敲させねばならぬ。

(文例 m) 僕は彼が心から愛し心から敬服していた。(一・男)

不注意な誤りと言ってしまうまでもあるが、ただ単に不注意と言ってしまうずに、日常使い慣れていない言葉づかいをする時に、その改まった言葉に対する神経の使い過ぎ注意のし過ぎが原因となっていることも考えてやらねばならない。

Ⅳ 接続法の問題——接続詞の使い方を誤った例はほとんど見られないが、話題の進行の曲折ということでは重要なものではあるし、それに文相互間のウェイトの軽重にも関係のあることゆえ、常識的に次のような一言の注意は促さねばならない。

(1) 「ところで・時に・一方・さて」などの話題転換の接続詞は話の運び方を急角度に曲げる。

(2) 「ところが・しかし・にもかかわらず・けれども」などの逆接の接続詞や、「だから・従って・故に・それで」などの順接の接続詞はそれに次ぐ。

(3) 「つまり・要するに・すなわち・むしろ・なお」などの追加説明の接続詞では話の運びはほとんど曲がらない。

また文のウェイトの軽重に關しても、次の各文の傍線部を比較してみてわかるように、

(1) 「私は涙が出そうだった。私はじっと耐え忍んだ。」という

終止法ではウェイトは重いが、

(2) 「私は涙が出そうだったが、じっと耐え忍んだ。」という接続詞にすると、同じ内容でも軽くなる。

(3) 「涙が出そうだった私は、それをじっと耐え忍んだ。」と修飾法にするとなお一層軽くなってしまふ。

ということを知っておく必要もあろう。これらのことからは、説解の時には十分認識させることが大事だが、それを表現する時にも役立てねばならない。

Ⅴ 適語選択の問題——これがいわゆる「推」か「敲」かという、語源的な意味での推敲なのであるが、事実はその以前の問題であるとも言える。すなわち、児童語から成人語への過渡期としての現象が見られるのである。熟していきにくせに難語を用いようとする傾向が強く、中途半端な用語法が多く見られるのである。若干の例を挙げてみよう。いずれも傍線部が問題である。

(文例 n) そのため争いをしたこともたくさんあります。

(一・女)

回数が多いのだから「たくさん」より「度々」がふさわしくはなにか。

(文例 o) 人間は考える葦だ。そう。人間は自然の中で一番弱い。

(一・女)

「一番」ときめつけるのはどうであらう。「非常に」の方が穏当で

ある。

(文例 P) 教室を出て外を見たら雨がちらほら降っていた。

(一・男)

「ちらほら」では雨の重量感は感じられない。たとえ少量の雨でも。

(文例 q) 彼は一枚の写真と共に去った。

(一・女)

「風と共に去りぬ」とはわけが違ふ。「…を残して」とすべき所。

「わざわざむずかしい言い方をするな」という注意がここでも必要だ。

(文例 r) クラスの先生もホガラカでとうしゅ満々の青きにもえた先生で、僕には大へん気やすかった。

(一・男)

むずかしい言い方をしてかえって何のことやら判断しかねるものになった。

(文例 s) この三毛は「しろ」に比べると雲泥の差の程根性が悪い。

(一・男)

何とこなれの悪いことばであろう。これも消化不良の例である。

(文例 t) すると今まで聞こえよがしだった虫の音が、あちらの

やぶ、こちらの草原からと四方八方から、美しい虫の音楽がきそつた。

(一・女)

「聞こえよがし」ということばをどんなつもりで使ったのであろうか。また、「音楽がきそつ」という言い方も、ここでは黙していいようだ。「音楽をきそつた」のではなからうか。

(文例 u) Hさんの悪点は、他人をなじることばかり急で、自分への忠告は聞こうとしないことです。

(一・女)

「悪点」とは「物事を悪く批評すること(広辞苑)」である。「欠点」とすべきところだ。

(文例 v) 立派な社会人にはなりたくない。平凡な社会人になりたい。

(一・女)

「有名になろうとは思わない。平凡でもいいから……」という気持であろう。「立派な」を否定するのはことばを疎略にし過ぎたと言えよう。

以上、一部の例を挙げたに過ぎないが、要するに、導入期の「こういうふうには書くな」という注意をさらに具体化したものに過ぎない。ただ、私たちは、こうして「語法」の指導をする場合、どこまでも、孤立した「文法学」として与えるべきでなく、表現に当って「日本語への愛情を持たせる」という点に重きをおくべきである。そして、同時に「主題を強調することをも強調すべきである。

さて、実際にことばへの愛情を持たせるためには、誤りを各自に気づかせることが必要であるが、放っておいては気づくことは少ないことだから、私たちは指摘だけはして、添削・推敲は各自にさせるのが望ましい方法であろう。その方が、一つ一つ添削するよりは私たちの多忙さも少なくなり、しかも効果は上がるのである。私は二度目の添削からそれを行なった。推敲させたい部分に傍線を施し、

○「この部分は読み直して文意があやまりなく伝わるようにしてみよう。」

○「この助詞の使い方はこれでいいでしょうか。」

○「このことばはもっと他の適語を探してみたらどうだろう。」

などと書き込んだ。全体に対しては二、三の例を板書して相互に添削させる形で考えさせて来た。相互添削の方法は最も効果のある方法であった。また、回収した作文には指摘した個所が訂正されていることが多い。

なお、これらの指導に当っては、平井昌夫氏著「文章採点」（講談社刊）や岩淵悦太郎氏編「悪文」（新評論社）を参考にするとよい。大久保忠利氏他の「言葉の魔術」（NHK）もことばによる思考を育てる上で貴重な書物である。立場のやゝ異なるものでは、清水幾太郎氏著「論文の書き方」（岩波新書）を、生徒たちに一読すめたい。小説家の、例えば谷崎潤一郎氏や川端康成氏、宇野浩二氏や三島由紀夫氏らの「小説の文章」「文章読本」「小説作法」などは、それらの後に読ませてよからう。小説などの創作への指導

は、急がなくてもよいし、全員にする必要もないのだから。

注5 野間宏「生活綴方・記録と小説・文学」（雑誌「生活と文学」所収）の中の意見が参考になった。

（八代高校教諭）